

わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望（3） —事例研究におけるいじめ被害者の対処法といじめの長期的影響との関連—

亀田 秀子* 会沢 信彦**

Trends in and Future Prospects for Research on the Long-Term Effects of Bullying in Japan (3): Case Studies on the Relationship between How Bullied Individuals Cope with Bullying and the Long-Term Effects of Being Bullied

Hideko KAMEDA, Nobuhiko AIZAWA

要旨 本研究の目的は、文献を対象に、いじめ被害者の対処法といじめの長期的影響との関連について検討することである。対象文献は、事例研究の8論文（21事例）であった。いじめ被害者の対処法は、無抵抗群、相談群、周囲からのサポート群の3群に分類された。いじめの長期的影響は、無抵抗群において“否定的影響”のみであった。相談群と周囲からのサポート群において“肯定的影響”と“否定的影響”がみられた。外傷後成長（PTG）に至るケースでは、【教師・友人・家族との良好な関係】、【いじめを乗り越える対処法】が重要な要因であることが示唆された。外傷後ストレス障害（PTSD）に至るケースでは、＜暴力による壮絶ないじめ＞、＜友人・教師の無関心＞が重要な要因として示唆された。いじめの長期的影響は深刻であり、心の傷の回復に向けたアプローチと支援方法の確立が急がれるところである。

キーワード：いじめられた体験 いじめの対処法 いじめの長期的影響 外傷後成長（PTG）
外傷後ストレス障害（PTSD）

問題と目的

「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」において、いじめの認知件数は、543,933件と過去最多となった。いじめの態様では、パソコンや携帯電話等を使ったいじめは、16,334件であったことが報告された（文部科学省，2019）。近年、特定の児童生徒に対する誹謗中傷など、「ネット上のいじめ」が深刻な問題になっている。

また、いじめ防止対策推進法に基づき、生命、

身体、精神、金品に重大な被害が及ぶ「重大事態」と認定されたいじめも、前年度比78件増の474件となり、予断を許さない状況であるといえる。

深谷（2004）によれば、いじめの被害者は、人間関係に用心深くなり、社会的退却傾向を身につけるようになっていくと報告している。また、いじめ被害の影響には、抑うつ、自尊心の低下、心身症、対人不安などの不適應症状が現われ、不適應状態は少なくとも青年期後期まで持続するといわれている（坂西，1995；荒木，2005）。

わが国において最初にいじめ被害の影響に関する論文を報告したのは、立花（1990）である。立花（1990）によれば、いじめの場面がありありと

* かめだ ひでこ 十文字学園女子大学人間生活学部

** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部心理教育課程

目に浮かび、そのたびに不安と恐怖に悩まされるという再体験が認められるものがあり、いじめも外傷後ストレス障害 (Post-traumatic Stress Disorder: 以下、略してPTSDと称す) を引き起こすストレスとなり得ると述べている。光武(1997)は、いじめが原因で登校を拒否した子どもに不眠、夜驚、悪夢、体の硬直など、外傷後ストレス障害 (PTSD) の症状を示す者がいることを報告している。

坂西(1995)は通院経験がなく、いじめられた体験から多くの年数が経過している大学生(3,915名)を対象に、質問紙調査を実施した。初期の学校生活において体験したいじめは、成人した後までも身体的・精神的に持続的な影響を及ぼすこと、また、いじめられた体験が否定的な影響ばかりを与えているわけではないことも報告している。

香取(1999)は、大学生・短大生806名を対象に質問紙調査を実施しており、いじめの長期的影響には否定的な影響のみならず、「他者尊重」、「精神的強さ」、「進路選択への影響」の肯定的な影響もあることを報告した。「精神的強さ」が高いことについては、事故や犯罪の被害者など精神的ショックを受けた人がそれを乗り越え、人間的成長を遂げることもあることが知られている(Herman, 1992)。外傷後成長(Posttraumatic Growth: 以下、略してPTGと称す)と捉えられよう。

Herman(1992)は、外傷体験の生存者の中には、自分と同じように被害者となった人々を教育、司法等の努力によって救済することにエネルギーを集中し、将来、被害者となる人々が出ないようにしようとする人々がいることを報告している。

いじめの長期的影響に関する量的研究は、これまでも多くが蓄積されてきている。例えば、石橋・若林・内藤・鹿野(1999)は、大学生の過去のいじめ被害経験とその後遺症について検討している。三宅(2004)は、いじめ被害者経験と自己開示と成人期の愛着との関係について、森本

(2004)は、過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究を行っている。その他、亀田・相良(2010)による、過去のいじめ体験が青年期後期において及ぼす長期的影響に関する研究、山口・長野(2012)による、過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響等がある。

亀田・会沢・藤枝(2017)は1980年から2016年までの37年間におけるわが国の学会誌論文・大学紀要論文において、いじめの長期的影響に関する質的研究は、17本であることを報告している。

そこで、本研究では、「いじめの長期的影響」に関する質的研究の中で、「事例研究」に焦点を絞って検討する。

まず、いじめに対する被害者の対処法について検討する。いじめに対する被害者の対処について、坂西(1995)は、①無抵抗群(何もしないでいじめられるままになっていた)、②教師・家族群(友人ではなく兄弟や異なる世代の大人である教師、親や家族、あるいはその両者に援助を求めた)、③友人群(同世代である友人に援助を求めた)、④家族・教師・友人群(家族と教師と友人の三者すべてに援助を求めた)、⑤反撃群(一人で反撃した)、の5つに分類している。本研究では坂西(1995)の分類を参考にしながら、いじめ被害者の対処法を検討することにする。

すなわち、本研究の目的は、いじめ被害者の対処法といじめの長期的影響との関連について明らかにし、いじめの被害体験と外傷後成長(PTG)・外傷後ストレス障害(PTSD)との関連について検討することである。

外傷後成長(PTG)については、「外傷的な体験、すなわち非常に困難な人生上の危機、及びそれに引き続く苦しみの中から、心理的な成長が体験されることを示しており、結果のみならずプロセス全体を指す」とTedeschi & Calhoun(2004)によって定義されている。本研究では、この定義を参考にする。さらに、Tedeschi & Calhoun(1996)は、外傷後成長(PTG)の5つの肯定的

変化として、①他者との関係に肯定的な変化が生じる、②人生に新たな可能性を見出すようになる、③自身の強さを自覚するようになる、④精神的あるいは宗教的な成長を経験する、そして、⑤人生において何が大切であるのか、その優先順位が変わることとしており、本研究では、この視点も視野に入れて検討を行うこととする。

外傷後ストレス障害（PTSD）の定義においては、未だ確立された概念はないといわれている。本研究では、分析対象の論文のなかで「外傷後ストレス障害（PTSD）」として扱っているものを「外傷後ストレス障害（PTSD）に該当する」と捉えることにする。

ところで、「いじめの長期的影響」の期間についての定義であるが、いじめの長期的影響の期間について定義している研究は、今のところ見当たらない。本研究では、坂西（1995）が指摘している、「いじめを脱した短期間、例えば、半年や1年という時間の経過ではなく、多くの年数が経過した後のいじめの影響」と捉えることとする。

方法

1. 対象文献の抽出

文献の抽出に際しては、国立国会図書館（NDL Search）と国立情報研究所（CiNii）の文献検索システムを用いた。「いじめ+影響」、「いじめ+予後」、「いじめ+回復」、「いじめ+事例」、「いじめ+ケース」を検索語として検索し、1980年から2016年までのわが国の学術論文・紀要論文を抽出し、その中から「事例研究」を抽出した。なお、抽出に際しては大会発表・発表要旨、資料、シンポジウム等は対象から除外した。

2. 対象文献の分析方法

本研究では、事例研究を対象とし、問いに対する記述内容（ローデータ）をそれぞれ断片化し、類似の文献の記述内容をまとめあげてカテゴリーの同定を行うものとする。

結果と考察

1. 対象文献の概要

上記の検索の結果、いじめの長期的影響に関する事例研究は8本であった。したがって、対象文献として8本を選定した。内訳は、学会誌論文2本、大学紀要論文6本であった。

年次別文献数は、1995年1本、1998年1本、2002年1本、2004年1本、2009年1本、2011年2本、2012年1本の合計8本であった。「対象文献の概要」（文献番号、著者、発刊年、論文タイトル、研究方法・データ収集法、研究対象者、重要な語句、理論等）をTable 1に示した。

分析対象の論文8本における事例は計21事例であり、男性7名、女性14名であった。研究方法は、すべて半構造化面接によるものであった。

文献中の重要な語句（療法・理論等）は、文献1（久留・餅原、1995）では「心理療法」、文献2（清水、1998）では「kohut理論」、文献3（三浦、2002）では「スメルサーの集団行動理論の援用」、文献4（細澤、2004）では「心理療法」、文献5（伊東、2009）では「心理治療」、文献6（岩崎・海蔵寺、2011）では「心理的支援」、文献7（亀田・相良、2011）では「自己成長感」、文献8（橋本、2012）では「レジリエンシー」であった。

2. いじめ被害者の対処法といじめの長期的影響との関連

いじめに対する被害者の対処法は、坂西（1995）の分類を参考にした。対象文献の記述内容を確認し、類似したもの同士をグループ化したところ、①無抵抗群（何もしないでいじめられるままになっていた）、②相談群（友人・家族・教師等誰かに相談した）、③周囲からのサポート群（周囲がいじめられていることに気づき、家族・友人等の周囲のサポートを得た）、の3群に分類できた。

問いに関する記述項目は、①いじめられた時期、②初発のいじめからの経過年数、③いじめの内容【いじめの分類】、④教師・友人・家族の関わり、⑤いじめ被害時の対処法、⑥いじめによる長期的影響である。

Table 1 分析対象の論文の概要

文献 番号	著者 (発刊年)	論文タイトル	研究方法 データ収集法	研究対象者 人数・事例；学年・年齢 (性別)	重要な語句 理論等
1	久留・餅原 (1995)	外傷後ストレス障 (PTSD) に関する治療心理学的研究—極度のいじめの事例を通して—	事例研究 半構造化面接 治療過程の報告	1名 事例1：17歳 (男性)	心理療法, 自律訓練の習得：「睡眠障害」の克服
2	清水 (1998)	「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的影響について—自己愛性格症例の治療経験から—	事例研究 半構造化面接 治療過程の報告	1名 事例1：23歳 (男性)	Kohut理論：自己愛的障害の治療における共感の理解を明確に位置づけた自己愛的人格の治療
3	三浦 (2002)	いじめ過程モデルの検証—いじめ被害者の事例を通して—	事例研究 半構造化面接 個別の事例分析	1名 事例1：29歳 (女性)	スメルサーの集団行動理論の援用：6段階からなる「いじめ過程モデル」の構築
4	細澤 (2004)	いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的心理療法	事例研究 半構造化面接 心理療法過程の記述	1名 事例1：21歳 (女性)	心理療法, 中核的葛藤, 基底欠損水準, 力動的心理療法, PTSDの3主徴 (DSM-IV)：①再体験, ②回避・麻痺, ③覚醒亢進状態
5	伊東 (2009)	いじめから心身症状を呈した思春期女子の心理治療過程	事例 (症例) 研究 半構造化面接 心理治療過程の記述	1名 事例1：13歳 (女性)	心理治療：十分なアセスメントによる適切な治療, 病院, 学校, 家庭との連携
6	岩崎・海蔵寺 (2011)	過去のいじめられた経験からの回復過程について—自己否定感のあるクライエントの事例を通して—	事例研究 半構造化面接 回復過程を時間の経過に沿って報告	1名 事例1：23歳 (男性)	心理的支援, 共感的理解, 客観的認知の推進
7	亀田・相良 (2011)	過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討—いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討—	事例研究 半構造化面接	10名 事例1：22歳 (女性) 事例2：20歳 (女性) 事例3：21歳 (女性) 事例4：21歳 (女性) 事例5：20歳 (男性) 事例6：20歳 (女性) 事例7：20歳 (男性) 事例8：21歳 (男性) 事例9：21歳 (女性) 事例10：21歳 (男性)	自己成長感：辛い出来事でもその体験を経て, 自己の成長を自覚していることを「自己成長感」と定義する
8	橋本 (2012)	リジリエンシーに関する一考察—いじめからの回復の語り—	事例研究 半構造化面接	5名 事例1：21歳 (女性) 事例2：22歳 (女性) 事例3：24歳 (女性) 事例4：18歳 (女性) 事例5：18歳 (女性)	リジリエンシー：危機に直面しながらも適応に成功する力

対象文献の記述項目に対する記述内容をまとめ、「3つの対処群におけるいじめの長期的影響の記述分析」(Table 2-1, 2-2)を示した。

本文や表中において、記述内容は「 \square 」、サブカテゴリーは「 \triangleleft 」, カテゴリーは「 \square 」で表記した。

いじめの長期的影響には、「肯定的影響」と

「否定的影響」がある。本研究における「肯定的影響」と「否定的影響」の定義は、香取 (1999) の「プラスの影響」と「マイナスの影響」を参考にする。香取 (1999) は、「プラスの影響」には、他者尊重, 精神的強さ, 進路選択への影響があるとしているが、本研究では、「肯定的影響」という用語を用いる。また、「マイナスの影響」につ

いては、情緒的不適応、同調傾向、他者評価への過敏があるとしているが、本研究では、「否定的影響」という用語を用いることとする。

（1）無抵抗群におけるいじめの長期的影響

無抵抗群の事例は、1-1（文献1中の事例1を示す）、2-1、3-1、4-1、5-1、6-1、7-6、7-7、7-8、7-10、8-1、8-2、8-5の13事例が該当した（Table 2-1、2-2）。

Table 2-1 3つの対処群におけるいじめの長期的影響の記述分析

事例No 性別・年齢	いじめられた時期 (経過年数)	いじめの内容 【いじめの分類】	いじめ被害時の対処法 教師・友人・家族の関わり	いじめによる長期的影響
無抵抗群				
1-1 男性・17歳	高 初発から3年	寮生活にて、深夜に突然の暴力が数か月続いた【暴力】	抵抗できなかった。友人は見ても見ぬふり、教師は臭いものに蓋をする状況。	不登校状態が続き、高校退学。部屋に閉じこもる。うつ状態、無気力さ、心気的発症の出現、PTSDの発症。
2-1 男性・23歳	中 初発から10年	学校のトイレに呼び出される等、【脅し】	何もできなかった。学校では目立たないようにしていた。級友からの関わりは少なかった。	高1の時、心の病を患う。何年間も家に閉じこもる。対人恐怖症状、他者への不信感を抱く。1年2か月43回の面接を行う。
3-1 女性・29歳	中 初発から16年	友人関係のこじれから無視、【仲間外れ】	本人は何もできなかった。家族が、Aさんの状況を見極め、適切な援助者を見つけ、直接加害者に働きかけた。	いじめ体験の痛手が癒されていない（直接インタビューを行うのは困難であり、母親と姉へのインタビューを行った）
4-1 女性・21歳	小・中 初発から10年	言葉と暴力による慢性のいじめ、【暴力】	何もできずにいた。小・中とともに、教師は有効な解決策は講じようとされなかった。	大学入学後、高校の時の恋人との別れをきっかけに、PTSD症状が発現。フラッシュバック等の再体験。
5-1 女性・13歳	小・中 初発から2年	からかい、無視【嫌がらせ】	何もできなかった。学校での休み時間、一人でベランダに座っている状態。母は厳格な養育態度である。	小6のいじめが思い出され、自傷行為が始まる。情緒的不適応、他者評価への過敏傾向。
6-1 男性・23歳	小・中 初発から16年	チック症状をからかわれるいじめ、【嫌がらせ】	何もしなかった。小学校では友だちはいない。中学校では数人とだけ話す。親、教師からも心理的サポートを受けられない。	対人不信感、自己否定感、他者に対する不信感や警戒心、見捨てられ不安等、心療内科受診に至る。
7-6 女性・20歳	小 初発から13年	命令と悪口【嫌がらせ・脅し】	悪口を言われても黙っていた。命令されても言い返すことができず、ただ、従っていた。相談できなかった。	いじめを乗り越えた感じはない。このいじめがきっかけで成長したということはない。
7-7 男性・20歳	小・中 初発から13年	石を投げられた等【暴力】	抵抗できなかった。中2の時、両親が離婚。家庭で相談できる雰囲気ではなかった。父とは話さない。信頼できる友だちはいない。	自分も他人も信じられない。未消化のまま引きずっている。いじめを通して成長していない。
7-8 男性・21歳	小・中・高 初発から13年	使いつ走りのいじめ【脅し】	相談しても良くなるとは限らないので、相談しなかった。家族関係はあまり良くない。友だちとは表面的な付き合い。	今でも人と関わる時に戸惑う。仮面を被った自分がある。いじめから成長したとは言えない。
7-10 男性・21歳	小 初発から11年	言葉のいじめ【嫌がらせ】	家族関係は良くない。家庭で話せる雰囲気ではなかった。相談はしなかった。友だちはいない。	いじめのショックで、人前で話すのが苦手になった。いじめは乗り越えていないし、成長していない。

Table 2-2 3つの対処群におけるいじめの長期的影響の記述分析

事例No 性別・年齢	いじめられた時期 (経過年数)	いじめの内容 【いじめの分類】	いじめ被害時の対処法 教師・友人・家族の関わり	いじめによる長期的影響
無抵抗群				
8-1 女性・21歳	中・高 初発から8年	言葉によるいじめ 【嫌がらせ】	何もできずにいた。教師の誤った対応がいじめのきっかけとなった。	身体に不調が現われ、初期のうつ病と診断。いじめ体験から人間不信になり、他者との関わりを避けた。
8-2 女性・22歳	高 初発から6年	言葉の暴力、誹謗中傷する内容のいじめ 【嫌がらせ】	何もできなかった。周囲はからかいと捉えた。教師は適切な対応を行わなかった。	不登校になり、保健室登校もするが、心療内科通院となる。学校に通えなくなり、家に引きこもる。
8-5 女性・18歳	小・中 初発から6～11年	言葉や暴力によるいじめ 【暴力・嫌がらせ】	抵抗できなかった。直接相手と対峙するのではなく、離れることを選んだ。	強いストレスのため、円形脱毛症となることもあった。
相談群				
7-2 女性・20歳	小・中 初発から13年	【嫌がらせ・脅し】	顧問の先生に相談できた。周囲に訴えた	自分が言われて嫌なことは言わない。いじめを乗り越え、成長できたと感じている。
7-3 女性・21歳	中 初発から8年	部活時の無視等 【嫌がらせ・仲間外れ】	父に相談できた。仲の良い友だちがいた。	人に流されないようになった。いじめを乗り越え、成長できたと感じている。
7-4 女性・21歳	中・高 初発から8年	部活時の 【嫌がらせ・仲間外れ】	母とメル友に相談できた。周囲の援助があった。我慢した。	精神的に強くなれた。いじめを通して成長できた。嫌いな人でも相談に乗りたい。
7-5 男性・20歳	小・中・高 初発から11年	言葉でのいじめ 【嫌がらせ・仲間外れ】	家族・友だち・先生に相談できた。泣きながら、周囲に訴えた。	精神的に楽になって強くなった。いじめをさせている人の辛さも分かるし、相談に乗ることもできる。いい経験だったと思う。
7-9 女性・21歳	小・中 初発から14年	言葉によるいじめ 【嫌がらせ】	母に相談した。親しい友だちはいない。	人見知りするようになった。いじめを乗り越えるのは絶対無理。自分がされて嫌なことは人にしない。
8-3 女性・24歳	高 初発から6～8年	言いがかり、一方的な 【嫌がらせ】	学校から離れる。学校内に安全な場所を見つけた。学校での出来事を親に話すようになった。	疑心暗鬼になり、大学における人間関係の構築において戸惑いや失敗体験をしている。
周囲からのサポート群				
7-1 女性・22歳	小・中 初発から12年	言葉によるいじめ 【嫌がらせ】	母が気付いてくれた。先生が相談に乗ってくれた。母・先生・友だちのサポートがあった。	言い返せるようになった。自分がされて嫌なことはしない。いじめを乗り越え、成長できたと感じている。
8-4 女性・18歳	小 初発から8年	クラスの男子からの言葉のいじめ【嫌がらせ】	クラスに、心配してくれる人、相談に乗ってくれる人がいた。いじめの事態発覚により、担任教師からの指導があった。	男子に対する恐怖心を抱くようになった。中学以降、新たな関わりの中で安心感を獲得し、過去のいじめについて向き合えるようになった。

いじめられた時期は、小学校のみのいじめは2事例、中学校のみのいじめは2事例、高校のみのいじめは2事例であった。小学校・中学校の2つの学校段階にわたるいじめは5事例あり、中学校・高校の2つの学校段階にわたるいじめは1事例であった。小学校・中学校・高校の3つの学校段階にわたるいじめは、1事例であった。

初発のいじめからの経過年数は、10年以上経過している事例が8事例あることが分かった。いじめの内容の分類では、暴力が3事例、脅しが2事例、嫌がらせが5事例、仲間外れが1事例、嫌がらせと脅しが1事例、暴力と嫌がらせが1事例であった。

いじめ被害に遭った時の周囲との関係については、「友人は見て見ぬふり」(1-1)、「信頼できる友だちはいない」(7-7)、「友だちとは表面的な付き合い」(7-8)等、6事例において、友人との関

わりに希薄さがうかがえた。家族関係においては、「親からも心理的サポートを受けられない」(6-1)、「家族関係は良くない・家庭で話せる雰囲気ではなかった」(7-10)等、4事例において、家族関係が良好でないことが分かった。教師の関わりにおいては、「教師は臭いものに蓋をする状況」(1-1)、「教師からも心理的サポートを受けられない」(6-1)等、5事例において教師との希薄な関わりであることがうかがえた。

無抵抗群におけるいじめの長期的影響は、＜精神面・心理面への影響＞、＜対人関係のあり方に及ぼす影響＞、＜不登校・引きこもり＞、＜心の病等・PTSD＞、＜心理療法・面接＞、＜体験の否定的意味づけ＞、＜心の傷・心のしこり＞の7つのサブカテゴリー、計31個の記述内容から構成された（Table 3）。無抵抗群のいじめの長期的影響は、13事例とも否定的影響がみられた。

Table 3 無抵抗群におけるいじめの長期的影響の分析結果

【いじめの否定的影響】	
<p><精神面・心理面への影響> 「うつ状態、無気力さ」1-1 「情緒的不適応」5-1 「自己否定感」6-1 「見捨てられ不安」6-1 「強いストレスのため、円形脱毛症となった」8-5</p>	<p><心の病等・PTSD> 「心気的症状の出現、PTSDの発症」1-1 「高1の時、心の病を患う」2-1 「PTSD症状が発現」4-1 「フラッシュバック等の再体験」4-1 「小6のいじめが思い出され、自傷行為が始まる」5-1 「心療内科受診に至る」6-1 「身体に不調が現われ、初期のうつ病と診断」8-1 「診療内科通院となる」8-2</p>
<p><対人関係のあり方に及ぼす影響> 「対人恐怖症状」2-1 「他者への不信任感」2-1, 6-1, 「警戒心」6-1 「他者評価への過敏傾向」5-1 「今でも人と関わる時に戸惑う」7-8 「仮面を被った自分がある」7-8 「人前で話すのが苦手になった」7-10 「人間不信になり、他者との関わりを避けていた」8-1</p>	<p><心理療法・面接> 「1年2か月43回の面接を行う」2-1</p>
<p><不登校・引きこもり> 「不登校状態が続き、高校退学」1-1 「部屋に閉じこもる」1-1 「何年間も家に閉じこもる」2-1 「不登校になり、保健室登校」8-2 「学校に通えなくなり、家に引きこもる」8-2</p>	<p><体験の否定的意味づけ> 「いじめを乗り越えた感じはない」7-6 「いじめを通して成長していない」7-6, 7-7, 7-8 「いじめは乗り越えていないし、成長していない」7-10</p>
	<p><心の傷・心のしこり> 「いじめ体験の痛手が癒されていない」3-1</p>

＜精神面・心理面への影響＞においては、「自己否定感」(6-1)、「見捨てられ不安」(6-1)、そして、「情緒的不適応」(5-1)等がみられた。＜対人関係のあり方に及ぼす影響＞として、「他者への不信感」(2-1)、(6-1)や「警戒心」(6-1)がみられ、「他者評価への過敏傾向」(5-1)、「対人恐怖症状」(2-1)に至った者もいる。＜不登校・引きこもり＞では、「不登校状態が続き、高校退学」(1-1)、「何年間も家に閉じこもる」(2-1)等の状態が明らかになった。＜心の病等・PTSD＞においては、「心気的症状の出現、PTSDの発症」(1-1)、そして、「診療内科受診に至る」(6-1)という事例もあり、深刻な影響がうかがえる。また、＜心理療法・面接＞を受ける者や、「いじめを乗り越えた感じはない」(7-6)等、＜体験の否定的意味づけ＞の事例もみられた。さらに、「いじめ体験の痛手が癒されていない」(3-1)という＜心の傷・心のしこり＞もみられた。

いじめ被害に遭った時に、何もしないでいる「無抵抗群」では、＜心の病等・PTSD＞という深刻な状況に至るケースがあることが明らかになった。

(2) 相談群におけるいじめの長期的影響についての検討

相談群の事例は、7-2, 7-3, 7-4, 7-5, 7-9, 8-3の6事例が該当した (Table 2 - 2)。

いじめられた時期については、中学校のみのいじめが1事例、高校のみのいじめが1事例であった。小学校・中学校でのいじめが2事例、中学校・高校が1事例であった。小学校・中学校・高校でのいじめが1事例であった。初発のいじめから10年以上経過している事例は3事例であった。

いじめの内容の分類では、嫌がらせが2事例、嫌がらせと脅しが1事例、嫌がらせと仲間外れが3事例であった。周囲の関わりは、先生や顧問の先生に相談できたが2事例、父や母、親、友だちに相談できたが5事例であった。

相談群におけるいじめの長期的影響の分析結果は、【いじめの肯定的影響】、【いじめの否定的影

響】の2つのカテゴリーで構成された。【いじめの肯定的影響】は、＜精神的強さ＞、＜他者尊重＞、＜共感力＞、＜援助志向＞、＜体験の肯定的意味づけ＞、＜自己成長感＞の6つのサブカテゴリー、計10個の記述内容で構成された。【いじめの否定的影響】は、＜対人関係のあり方に及ぼす影響＞、＜心の傷・心のしこり＞の2つのサブカテゴリー、計4個の記述内容で構成された (Table 4)。

いじめの肯定的影響の事例 (7-2, 7-3, 7-4, 7-5) では、「人に流されないようになった」(7-3)、「精神的に強くなれた」(7-4)等の＜精神的強さ＞がみられた。また、「自分が言われて嫌なことは言わない」(7-2)の＜他者尊重＞の気持ちも芽生えている。さらに、「いじめをされている人の辛さも分かる」(7-5)の＜共感力＞、そして、「嫌いな人でも相談に乗りたい」(7-4)等の＜援助志向＞がうかがえる。＜体験の肯定的意味づけ＞は、「いい経験だったと思う」(7-5)といじめられた体験をふり返り、肯定的な意味づけを与えている。＜自己成長感＞は、「いじめを乗り越え、成長できたと感じている」(7-2, 7-3)、「いじめを通して成長できた」(7-4)といじめ被害の体験を通して成長したことを実感していることが分かる。

いじめの否定的影響の事例 (7-9, 8-3) では、「人見知りするようになった」(7-9)、「疑心暗鬼になる」(8-3)等、＜対人関係のあり方に及ぼす影響＞もみられた。また、「いじめを乗り越えるのは絶対無理」(7-9)といった＜心の傷・心のしこり＞が未だに癒えない事例もあった。

相談するという積極的な対処法を取った場合では、いじめの影響は肯定的影響も否定的影響もみられた。肯定的影響に至ったケースでは、親、友だち、先生など複数の人に相談しており、仲の良い友だちの存在、周囲の援助があったことが明らかになった。

(3) 周囲からのサポート群におけるいじめの長期的影響についての検討

周囲からのサポート群は、7-1, 8-4の2事例が該当した (Table 2 - 2)。

Table 4 相談群におけるいじめの長期的影響の分析結果

<p>【いじめの肯定的影響】</p> <p><精神的強さ> 「人に流されないようになった」7-3 「精神的に強くなれた」7-4 「精神的に楽になって強くなった」7-5</p> <p><他者尊重> 「自分が言われて嫌なことは言わない」7-2</p> <p><共感力> 「いじめをされている人の辛さも分かる」7-5</p> <p><援助志向> 「嫌いな人でも相談に乗りたい」7-4 「相談に乗ることもできる」7-5</p> <p><体験の肯定的意味づけ> 「いい経験だったと思う」7-5</p> <p><自己成長感> 「いじめを乗り越え、成長できたと感じている」7-2, 7-3 「いじめを通して、成長できた」7-4</p>	<p>【いじめの否定的影響】</p> <p><対人関係のあり方に及ぼす影響> 「人見知りするようになった」7-9 「疑心暗鬼になる」8-3 「人間関係の構築において戸惑いや失敗体験」8-3</p> <p><心の傷・心のしこり> 「いじめを乗り越えるのは絶対無理」7-9</p>
---	---

いじめられた時期は、小学校でのいじめが1事例、小学校・中学校でのいじめは1事例であった。初発のいじめからの経過年数は、8年経過が1事例、12年経過が1事例であった。

いじめの内容の分類では、嫌がらせによるいじめが2事例であった。周囲の関わりは、母、先生、友人のサポートが2事例であった。

周囲からのサポート群におけるいじめの長期的影響は、【いじめの肯定的影響】と【いじめの否定的影響】の2つのカテゴリーにまとめられた。【いじめの肯定的影響】では、<精神的強さ>、<他者尊重>、<いじめ体験の肯定的変化>、<自己成長感>の4つのサブカテゴリー、計5つの記述内容から構成された。【いじめの否定的影響】では、<対人関係のあり方に及ぼす影響>の1つのサブカテゴリー、1個の記述内容で構成された（Table 5）。

【いじめの肯定的影響】においては、「言い返

せるようになった」（7-1）という<精神的強さ>や「自分がされて嫌なことはしない」（7-1）の<他者尊重>がみられた。<いじめ体験の肯定的変化>では、「新たな関わりの中で安心感を獲得」（8-4）し、「過去のいじめについて向き合えるようになった」（8-4）と肯定的な変化がうかがえる。<自己成長感>では、「いじめを乗り越え、成長できたと感じている」（7-1）ことが分かった。

【いじめの否定的影響】では、<対人関係のあり方に及ぼす影響>として「男子に対する恐怖心を抱くようになった」（8-4）ことが、明らかになった。

周囲からのサポート群では、「言い返せるようになった」（7-1）ケースもあれば、「男子に対する恐怖心を抱くようになった」（8-4）ケースもみられた。いじめ被害体験を糧に精神的に強くなる場合も、逆に恐怖心を抱いてしまう場合もあることが明らかになった。

Table 5 周囲からのサポート群におけるいじめの長期的影響の分析結果

<p>【いじめの肯定的影響】 <精神的強さ> 「言い返せるようになった」7-1</p> <p><他者尊重> 「自分がされて嫌なことはしない」7-1</p> <p><いじめ体験の肯定的変化> 「新たな関わりの中で安心感を獲得」8-4 「過去のいじめについて向き合えるようになった」8-4</p> <p><自己成長感> 「いじめを乗り越え、成長できたと感じている」7-1</p>	<p>【いじめの否定的影響】 <対人関係のあり方に及ぼす影響> 「男子に対する恐怖心を抱くようになった」8-4</p>
--	--

無抵抗群	否定的影響	精神的強さ・心理面への影響	不登校・引きこもり	対人関係のあり方に及ぼす影響	心の病等・PTSD	体験の否定的意味づけ	心の傷・心のしこり
	肯定的影響						
相談群	否定的影響			対人関係のあり方に及ぼす影響			心の傷・心のしこり
	肯定的影響	精神的強さ	他者尊重	共感力	援助志向	体験の肯定的意味づけ	自己成長感
周囲からのサポート群	否定的影響			対人関係のあり方に及ぼす影響			
	肯定的影響	精神的強さ	他者尊重			いじめ体験の肯定的変化	自己成長感

Figure 1 3つの対処群といじめの長期的影響

(4) 3つの対処群といじめの長期的影響についての検討

3つの対処群といじめの長期的影響について Figure 1 に示した。

1つ目の特徴として、「相談群」、「周囲からのサポート群」においては、肯定的影響と否定的影響の両方がみられたのに対して、「無抵抗群」では、否定的影響のみであった。不登校・引きこもりも見受けられ、心の病等・PTSDに至っているケースもあることが分かった。「無抵抗群」のいじめの長期的影響は深刻であるといえる。

2つ目の特徴は、「無抵抗群」、「相談群」、「周囲からのサポート群」の3つの群において、<対人関係のあり方に及ぼす影響>がみられた点である。「無抵抗群」では、<対人関係のあり方に及ぼす影響>の記述内容が8つ該当し、「対人恐怖症状」、「他者への不信感」、「他者評価への過敏傾向」等、「相談群」や「周囲からのサポート群」に比べて、いじめの長期的影響が深刻であると考ええる。

3つ目の特徴として、「相談群」、「周囲からのサポート群」において、<精神的強さ>、<他者

尊重>、<自己成長感>の共通のサブカテゴリーがみられた点である。相談することや、周囲からのサポートを得られる点で、周囲とのよりよい関係が築かれていることが予想できる。重要な他者の存在は、いじめを乗り越えやすくし、いじめ体験を糧に自己成長感を実感できるものと思われる。

4つ目の特徴として、「相談群」のみに、<共感力>、<援助志向>がみられた。いじめに遭った体験から、誰かに相談したことで、他者から共感を得られた体験が<共感力>につながっていることが予想される。また、共感してもらった体験をもとに、自分もいじめを受けている人に対して援助をしていきたいという<援助志向>に至るのではないかと考えられる。

3. いじめ被害体験と外傷後成長（PTG）との関連

Tedeschi & Calhoun (2004) の外傷後成長（PTG）の定義を参考にして検討したところ、7-1、7-2、7-3、7-4、7-5の5事例が該当した。

いじめ被害体験と外傷後成長（PTG）との関連は、【教師・友人・家族との良好な関係】、【いじめを乗り越える対処法】、【いじめの肯定的影響】、【外傷後成長（PTG）の肯定的変化】の4つのカテゴリーで構成された（Table 6）。

【教師・友人・家族との良好な関係】は、<教師との良好な関係>、<良好な友人関係>、<良好な家族関係>の3つのサブカテゴリー、計4個の記述内容で構成された。「顧問の先生に相談できた」（7-2）、「クラスに頼れる友だちがいた」（7-1）等からも分かるように、学校における教師や友人との良好な関係は重要であることが示唆された。

【いじめを乗り越える対処法】は、<反撃>、<耐えた・我慢した>、<自己変容への努力>の3つのサブカテゴリー、計7個の記述内容で構成された。いじめを乗り越えるためには、やり返したり（7-5）、時には、耐えたり、我慢したり（7-4）することも必要であることが明らかになった。さ

らに、「精神的に強くなろうとしていた」（7-3）、「自分で変わる努力をした」（7-5）という、<自己変容への努力>も見逃せない。

【いじめの肯定的影響】は、<精神的強さ>、<他者尊重>、<共感力>、<援助志向>、<体験の肯定的意味づけ>、<自己成長感>の6つのサブカテゴリー、計12個の記述内容で構成された。「人に流されないようになった」（7-3）や「精神的に楽になって強くなった」（7-5）等の<精神的強さ>がみられた。また、「自分がされて嫌なことはしない」（7-1）等の<他者尊重>、「いじめをされている人の辛さも分かる」（7-5）という<共感力>や、「嫌いな人でも相談に乗りたい」（7-4）等の<援助志向>の肯定的影響がみられた。さらに、「いい体験だったと思う」（7-5）という<体験の肯定的意味づけ>や「いじめを通して、成長できた」（7-4）等の<自己成長感>もみられた。

Tedeschi & Calhoun (1996) の外傷後成長（PTG）の5つの肯定的変化を参考にして検討したところ、【外傷後成長（PTG）の肯定的変化】では、<他者との関係に肯定的な変化が生じる>、<人生に新たな可能性を見出すようになる>、<自身の強さを自覚するようになる>、<精神的な成長を経験する>の4つのサブカテゴリー、計11個の記述内容で構成された。

これらは、Tedeschi & Calhoun (1996) の外傷後成長（PTG）の5つの肯定的変化のなかの4つに該当した。いじめを受けてもその相手に対して、「嫌いな人でも相談に乗りたい」（7-4）ということは、<他者との関係に肯定的な変化が生じる>ことであると解釈できよう。また、いじめ被害体験を「いい経験だったと思う」（7-5）と捉えることは、<人生に新たな可能性を見出すようになる>ことである。「精神的に強くなれた」（7-4）ことは、<自身の強さを自覚するようになる>ことであろう。「いじめを乗り越え、成長できたと感じている」（7-1、7-2、7-3）は、<精神的な成長を経験する>に該当するものと考えられる。

Table6 いじめ被害体験と外傷後成長（PTG）との関連の分析結果

<p>【教師・友人・家族との良好な関係】</p> <p><教師との良好な関係> 「小～中まで先生に恵まれた」7-1 「顧問の先生に相談できた」7-2</p> <p><良好な友人関係> 「クラスに頼れる友だちがいた」7-1</p> <p><良好な家族関係> 「周囲のサポートがあった」7-1</p> <p>【いじめの肯定的影響】</p> <p><精神的強さ> 「言い返せるようになった」7-1 「人に流されないようになった」7-3 「精神的に強くなれた」7-4 「精神的に楽になって強くなった」7-5</p> <p><他者尊重> 「自分がされて嫌なことはしない」7-1 「自分が言われて嫌なことは言わない」7-2</p> <p><共感力> 「いじめをされている人の辛さも分かる」7-5</p> <p><援助志向> 「嫌いな人でも相談に乗りたい」7-4 「相談に乗ることもできる」7-5</p> <p><体験の肯定的意味づけ> 「いい経験だったと思う」7-5</p> <p><自己成長感> 「いじめを乗り越え、成長できたと感じている」7-1, 7-2, 7-3 「いじめを通して、成長できた」7-4</p>	<p>【いじめを乗り越える対処法】</p> <p><反撃> 「反撃した」7-2 「やり返しているうちに乗り越えられた」7-5</p> <p><耐えた・我慢した> 「よく耐えて乗り越えた」7-4 「我慢した」7-4</p> <p><自己変容への努力> 「精神的に強くなろうとしていた」7-3 「意識して気にしないようにした」7-4 「自分で変わる努力をした」7-5</p> <p>【外傷後成長（PTG）の肯定的変化】</p> <p><他者との関係に肯定的な変化が生じる> 「自分がされて嫌なことはしない」7-1 「自分が言われて嫌なことは言わない」7-2 「嫌いな人でも相談に乗りたい」7-4 「いじめをされている人の辛さも分かるし、相談に乗ることもできる」7-5</p> <p><人生に新たな可能性を見出すようになる> 「いい経験だったと思う」7-5</p> <p><自身の強さを自覚するようになる> 「言い返せるようになった」7-1 「人に流されないようになった」7-3 「精神的に強くなれた」7-4 「精神的に楽になって強くなった」7-5</p> <p><精神的な成長を経験する> いじめを乗り越え、成長できたと感じている」7-1, 7-2, 7-3 「いじめを通して成長できた」7-4</p>
---	---

いじめ被害体験から外傷後成長（PTG）に至るには、周囲との良好な人間関係が根底にあり、いじめと向き合いながら、個々に応じた対処法として、反撃する、耐えたり我慢したりするという行動が見られる。その結果、【いじめの肯定的影響】や【外傷後成長（PTG）の肯定的変化】がみられることが示唆された。

4. いじめ被害体験と心の病等・外傷後ストレス障害（PTSD）との関連 いじめ被害体験と心の病等・外傷後ストレス障

害（PTSD）との関連における事例は、6事例が該当した。PTSD症状を発現した事例（1-1, 4-1）、心の病（2-1）・初期のうつ病（8-1）、心療内科受診・通院（6-1, 8-2）であった。

いじめ被害体験と心の病等・外傷後ストレス障害（PTSD）との関連は、【PTSD症状の発現】、【心の病・初期のうつ病】、【診療内科受診・通院】の3つのカテゴリーで構成された（Table 7）。

【PTSD症状の発現】は、＜暴力による壮絶ないじめ＞、＜友人・教師の無関心＞、＜精神面・

Table 7 いじめ被害体験と心の病等・外傷後ストレス障害（PTSD）との関連の分析結果

<p>【PTSD症状の発現】</p> <p><暴力による壮絶ないじめ> 「深夜に突然、極度の暴力が数か月続いた」 1-1 「言葉と暴力による慢性的いじめを経験」 4-1</p> <p><精神面・心理面への影響> 「うつ状態、無気力さなど続く」 1-1 「情動の不安定」 4-1</p>	<p><友人・教師の無関心> 「友人は見て見ぬふり、教師は臭いものに蓋をする状況」 1-1 「教師は、有効な解決策は講じようとされなかった」 4-1</p> <p><不登校・引きこもり> 「不登校状態が続く、部屋に閉じこもる」 1-1 「ひきこもり」 4-1</p>
<p>【心の病・初期のうつ病】</p> <p><陰湿ないじめ> 「脅しの電話があり、怖い思いをした」 2-1 「言葉によるいじめ」 8-1</p> <p><教師の誤った対応> 「教師の誤った対応がいじめのきっかけ」 8-1</p> <p><対人関係のあり方に及ぼす影響> 「対人恐怖症状」 8-1 「他者への不信任感」 8-1</p>	<p><居場所の確保> 「目立たないように努めて辛うじて自分の居場所を得ていた」 2-1</p> <p><引きこもり> 「何年間も家に閉じこもる」 2-1</p> <p><精神面・心理面への影響> 「自己評価の低下」 2-1</p>
<p>【診療内科受診・通院】</p> <p><陰湿ないじめ> 「チック症状をからかわれるいじめ」 6-1 「言葉の暴力と誹謗中傷という嫌がらせのいじめ」 8-2</p> <p><得られない周囲からのサポート> 「親、教師からも心理的サポートを受けられない」 6-1</p> <p><不適切な教師の対応> 「本人の訴えに対して、教師は適切な対応を行わなかった」 8-2</p>	<p><希薄な友人関係> 「小学校では友だちはいない、中学校でも数人と話すだけ」 6-1</p> <p><不登校・引きこもり> 「不登校になり、保健室登校も試みたが、家に引きこもるようになった」 8-2</p> <p><精神面・心理面への影響> 「対人不信感、自己否定感、見捨てられ不安」 6-1</p>

心理面への影響>、<不登校・引きこもり>の4つのサブカテゴリー、計8個の記述内容で構成された。

<暴力による壮絶ないじめ>では、「深夜に突然、極度の暴力が数か月続いた」(1-1)等のいじめがみられた。「友人は見て見ぬふり、教師は臭いものに蓋をする状況」(1-1)等の<友人・教師の無関心>が露呈されたといえよう。<精神面・心理面への影響>は、「うつ状態、無気力さなど続く」(1-1)、「情動の不安定」(4-1)があげられており、<不登校・引きこもり>に至るといふ深刻な状態であると考えられる。

【心の病・初期のうつ病】は<陰湿ないじめ>、<教師の誤った対応>、<対人関係のあり方に及ぼす影響>、<居場所の確保>、<引きこもり>、<精神面・心理面への影響>の6つのサブカテ

グリー、計8個の記述内容で構成された。

<陰湿ないじめ>では、「脅しの電話があり、怖い思いをした」(2-1)等の実態も分かった。いじめから身を守るために、「目立たないように努めて辛うじて自分の居場所を得ていた」(2-1)との記述内容からも<居場所の確保>は大切であったことが分かる。また、<教師の誤った対応>がきっかけでいじめが始まったケースや<引きこもり>になったケースも明らかになった。<対人関係のあり方に及ぼす影響>や「自己評価の低下」(2-1)という<精神面・心理面への影響>がみられた。

【診療内科受診・通院】は、<陰湿ないじめ>、<得られない周囲からのサポート>、<不適切な教師の対応>、<希薄な友人関係>、<不登校・引きこもり>、<精神面・心理面への影響>の6

つのサブカテゴリー、計7個の記述内容で構成された。

＜陰湿ないじめ＞では、「チック症状をからかわれるいじめ」(6-1)、「言葉の暴力と誹謗中傷という嫌がらせのいじめ」(8-2)等であったことが分かる。友人関係では、「小学校では友だちはいない、中学校でも数人と話すだけ」(6-1)という＜希薄な友人関係＞もうかがえる。また、「親、教師からも心理的サポートを受けられない」(6-1)という＜得られない周囲からのサポート＞も明らかになった。さらに、「本人の訴えに対して、教師は適切な対応を行わなかった」(8-2)という＜不適切な教師の対応＞もみられた。＜不登校・引きこもり＞に至り、「対人不信感、自己否定感、見捨てられ不安」(6-1)の＜精神面・心理面への影響＞もみられた。

いじめ被害体験と心の病等・外傷後ストレス障害(PTSD)との関連における重要な要因の1つ目は、いじめの内容である。【PTSD症状の発現】においては、＜暴力による壮絶ないじめ＞があったこと、【心の病・初期のうつ病】と【診療内科受診・通院】においては、＜陰湿ないじめ＞であったことが明らかになった。

2つ目に重要となる要因は、教師の関わりであ

る。【PTSD症状の発現】においては、＜教師の無関心＞、【心の病・初期のうつ病】においては＜教師の誤った対応＞、【診療内科受診・通院】においては、＜不適切な教師の対応＞が挙げられており、教師の希薄な関わりや不適切な対応により、いじめの長期的影響は深刻になってしまふことが示唆された。

3つ目に重要となる要因は、【PTSD症状の発現】、【心の病・初期のうつ病】、【診療内科受診・通院】の3つのカテゴリーに共通してみられた、＜不登校・引きこもり＞と＜精神面・心理面への影響＞であった。

5. 外傷後成長(PTG)に至る要因とプロセス、心の病等・外傷後ストレス障害(PTSD)に至る要因とプロセスの検討

いじめ被害体験といじめの長期的影響として、外傷後成長(PTG)に至る要因とプロセス、心の病等・外傷後ストレス障害(PTSD)に至る要因とプロセスをFigure 2に示した。

まず、外傷後成長(PTG)に至るケースと外傷後ストレス障害(PTSD)に至るケースとを分かつ要因について検討する。

分かつ要因の1つ目は、いじめの内容があげられる。外傷後ストレス障害(PTSD)に至った

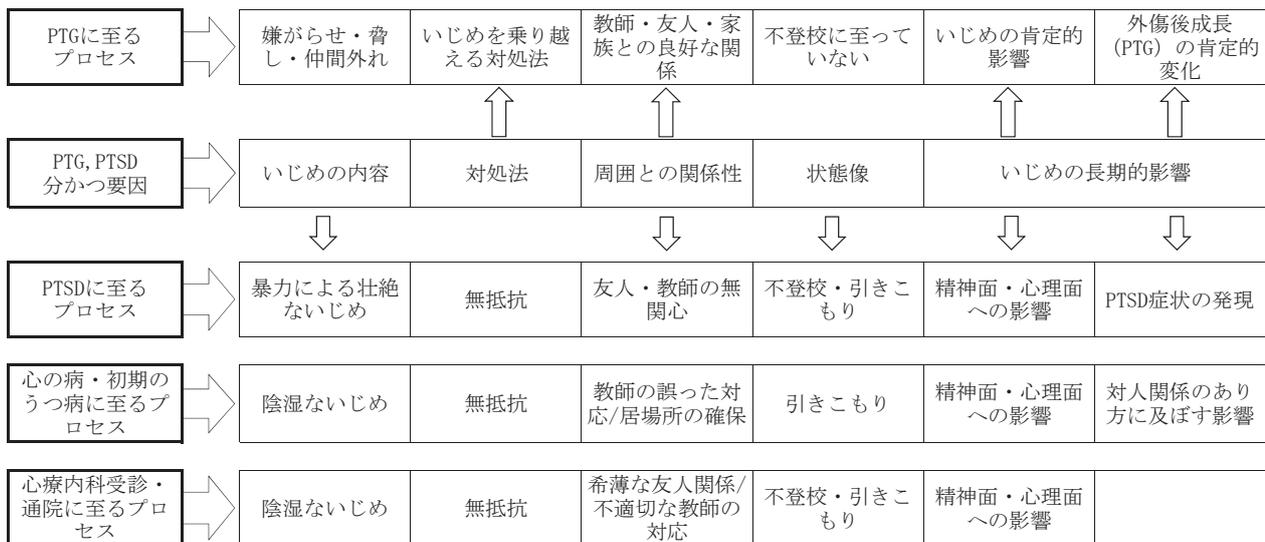


Figure 2 外傷後成長(PTG)・精神疾患・外傷後ストレス障害(PTSD)に至る要因とプロセス

ケースでは、＜暴力による壮絶ないじめ＞であったことが分かる。

分かつ要因の2つ目は、対処法によるものである。外傷後成長（PTG）に至るケースでは、【いじめを乗り越える対処法】がみられたのに対し、外傷後ストレス障害（PTSD）に至るケースでは、何もできなかった「無抵抗」であった点である。【いじめを乗り越える対処法】として、＜反撃＞、＜耐えた・我慢した＞、＜自己変容への努力＞があげられている。いじめと向き合い、いじめから逃げることなく、各々が自分にふさわしい対処法を選んでいくことが分かる。

分かつ要因の3つ目は、周囲との関係性である。外傷後成長（PTG）に至るケースでは、【教師・友人・家族との良好な関係】が構築されているのに対し、外傷後ストレス障害（PTSD）に至るケースでは、＜友人・教師の無関心＞があげられている。周囲との関係性が築かれていないため、周囲からの理解が得られない状態であると考ええる。

分かつ要因の4つ目は＜不登校・引きこもり＞という状態に陥ったか否かである。外傷後ストレス障害（PTSD）に至るケースでは、＜不登校・引きこもり＞に至っている。外傷後成長（PTG）に至るケースでは、不登校に至らなかったことが予想できる。

分かつ要因の5つ目は、いじめの長期的影響である。外傷後成長（PTG）に至るケースでは、【いじめの肯定的影響】、【外傷後成長（PTG）の肯定的変化】がみられるのに対し、外傷後ストレス障害（PTSD）に至るケースでは、＜精神面・心理面への影響＞、＜PTSD症状の発現＞がみられた。

次に、外傷後成長（PTG）に至るプロセス、外傷後ストレス障害（PTSD）に至るプロセス、心の病等に至るプロセスについて検討する（Figure 2）。

外傷後成長（PTG）に至るプロセスは、まず、いじめ被害に遭った時に、各々が自分なりの【い

じめを乗り越える対処法】で、いじめと向き合っている。【教師・友人・家族との良好な関係】が築かれており、周囲からのサポートを得やすい状態であることが想定できる。そして、【いじめの肯定的影響】や【外傷後成長（PTG）の肯定的変化】がみられ、【外傷後成長（PTG）】に至っている。

外傷後ストレス障害（PTSD）に至るプロセスは、＜暴力による壮絶ないじめ＞を受けており、何も抵抗できずにいたと考えられる。また、＜友人・教師の無関心＞等、周囲からのサポートが得にくい状態である。そして、＜不登校・引きこもり＞に至り、＜精神面・心理面への影響＞を受け、【PTSD症状の発現】に至っている。

【心の病・初期のうつ病】に至るプロセスは、＜陰湿ないじめ＞を受けており、自身が抵抗することもなく、＜教師の誤った対応＞がみられる。また、＜居場所の確保＞をして自分自身を守り、やがて＜引きこもり＞に至る。＜精神面・心理面への影響＞や＜対人関係のあり方に及ぼす影響＞を受け、【心の病・初期のうつ病】に至ったことが分かる。

【診療内科受診・通院】に至るプロセスは＜陰湿ないじめ＞を受けており、自身が抵抗することもなく、＜希薄な友人関係＞や＜不適切な教師の対応＞がみられる。そして、＜不登校・引きこもり＞に至り、＜精神面・心理面への影響＞を受け、【診療内科受診・通院】に至ったことが分かる。

本研究からの提言と課題

本研究の目的は、いじめ被害者の対処法といじめの長期的影響との関連を明らかにし、いじめ被害体験と外傷後成長（PTG）・外傷後ストレス障害（PTSD）との関連について検討することであった。本研究の結果から以下の4つの提言を行う。

1つ目の提言として、いじめられた児童生徒が、＜不登校・引きこもり＞に至らないようにするための予防的な対応の必要性についてである。

学校全体として、いじめが要因で不登校に陥っている児童生徒への組織的対応が求められる。教師のいじめや不登校に対する問題意識を喚起し、教師の積極的な行動に結びつける取り組みが必要である。

2つ目の提言として、深刻な対人恐怖に陥っている人たちへの心理的なケアやアプローチの検討が求められる。カウンセリングや心理療法により、いじめ被害からの回復に至った研究の蓄積が重要であると考えられる。

3つ目の提言として、教師のいじめに対する認識を高め、いじめ被害に遭っている児童生徒への教師の関わりを大切にしていくことである。

『生徒指導提要』（文部科学省、2011）においても、いじめ問題への対応として、いじめを許さない学級づくりの推進や、児童生徒が発する小さなサインを見逃すことのないよう、教師は日頃から丁寧な児童生徒理解を進めることの重要性を記している。

いじめ被害体験から外傷後成長（PTG）に至る要因として、周囲との良好な人間関係の構築や、いじめと向き合い、自分なりの対処法を持つことの重要性が示唆された。

4つ目の提言として、これらの研究結果を教育現場に還元していく役割が研究者に求められる。

青年期後期においても、いじめの被害者はいじめの傷を残したまま日常生活を送ることを想定すると、いじめの予後の見通しを持った支援の検討が急がれる。

過去のいじめられた体験が、青年期後期の進学や就職、成人期の結婚等のライフイベントにおいても、少なからず、いじめの影響を受けることが予想される。いじめの長期的影響は深刻であることから、精神面、心理面に対するケアが重要であるとともに、支援方法の確立が必須であると考えられる。

本研究の課題は、分析対象の論文が8本と少ないなかでの検討であった点である。いじめの長期的影響といじめの予後の緩和や心の傷の回復に向

けたアプローチと支援法の研究を進めていくことが今後の課題である。

引用文献

- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について パーソナリティ研究, 14, 54-68.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- 深谷和子 (2004). いじめの被害者に残る後遺症 青少年問題, 51, 10-15.
- 橋本 綾 (2012). リジリエンシーに関する一考察 —いじめからの回復の語り— 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 8, 30-37.
- Herman, J. L. 1992 *Trauma and recovery*. New York: Harper Collins. (中井久夫訳 1996 心的外傷と回復 みすず書房)
- 久留一郎・餅原尚子 (1995). ストレス障害 (PTSD) に関する治療心理学的研究 —極度のいじめの事例を通して— 鹿児島大学教育学部研究紀要, 47, 121-141.
- 細澤 仁 (2004). いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的な心理療法 心理臨床学研究, 22, 240-249.
- 石橋佐枝子・若林慎一郎・内藤 徹・鹿野輝三 (1999). 大学生の過去のいじめ被害経験とその後遺症の研究 —対人恐怖心性との関わり— 金城学院大学研究所紀要, 3, 11-19.
- 伊東真里 (2009). いじめから心身症状を呈した思春期女子の心理治療過程 吉備国際大学紀要, 19, 59-66.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2011). 過去のいじめられ経験からの回復過程について —自己否定感のあるクライアントの事例を通して— 流通科学大学論集, 24, 29-39.
- 亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁 (2017). わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望

- 1980から2016年までの学術論文・大学紀要論文における研究の動向と課題— 文教大学教育学部紀要, 51, 333-347.
- 亀田秀子・相良順子 (2010). 過去のいじめ体験が青年期後期においても及ぼす長期的影響—自己成長感を分ける要因の検討— 聖徳大学児童学研究所紀要, 12, 13-20.
- 亀田秀子・相良順子 (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討—いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討— カウンセリング研究, 44, 277-267.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 3, 1-13.
- 光武充雄 (1997). いじめによる不安障害を乗り越えて—PTSDからの理解と支援— 日本カウンセリング学会第30回大会発表論文集, 194-195.
- 三浦恭子 (2002). いじめ過程モデルの検証—いじめ被害者の事例を通じて— 奈良女子大学社会学論集, 9, 19-39.
- 三宅邦建 (2004). いじめの被害者経験とその自己開示と成人期の愛着との関係 九州保健福祉大学研究紀要, 5, 1-10.
- 文部科学省 (2011). 生徒指導提要 教育図書
- 文部科学省 (2019). 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について (その1)
<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>
(参照: 2019. 12. 21)
- 森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究 心理臨床学研究, 22, 441-446.
- 清水信介 (1998). 「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的影響について—自己愛性格症例の治療経験から— 札幌学院大学人文学会紀要, 62, 215-234.
- 立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について 精神神経学雑誌, 92, 321-342.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the Positive Legacy of Trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). Posttraumatic Growth: Conceptual Foundations and Empirical Evidence. *Psychological Inquiry*, 15, 1-18.
- 山口由加・長野恵子 (2012). 過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響 西九州大学健康福祉学部紀要, 43, 39-48.

